

源氏物語繪本

全

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80



夕山
 外
 月
 海
 水
 石
 山
 八
 景

近江
 八景
 石山
 の
 秋の
 月



雲をくぐり
 あじふ
 夕風を
 よそふ
 名をふる
 唐崎の松
 思ふその境
 ちがふ
 三井の
 入相のうね

唐崎の松

三井の

唐崎の松

守山まき
 まきまき
 夕日の日る
 勢田の
 長江

勢田の



雲をくぐり
 あじふ
 夕風を
 よそふ
 名をふる
 唐崎の松
 思ふその境
 ちがふ
 三井の
 入相のうね

唐崎の松

唐崎の松

唐崎の松

去帆引くやせせふ
 かる舟ハ今
 うちをの浜を
 あとの追風

此源氏物語の事、往古より貴賤となく人々の好むる変他書
 小越より。さき此道の先達心切小。さぬぐ。註解を
 する書籍牛小汗一棟子充る小不堪其志一何もの
 りども其本文ども讀得る事か。又漢えりて解
 するの亦一。ま。故人の註釋せる。河海明星孟律
 岷江辨引萬水湖月。の類卷數多き大部の品、更も
 以るも十帖をさる源氏華の轉り。紹巴抄忍草等小て問
 合をさるま。か。をさる者わ。一覽するも
 た中より。五十四帖の繪を寫し。画上小一首たりたを
 あげ。児童の眼小ふ。聊物語のゆき。をさる
 天保丁酉の冬再版
 李園主人志る

は源氏物語の事、往古より貴賤となく人々の好むる変他書
 小越より。さき此道の先達心切小。さぬぐ。註解を
 する書籍牛小汗一棟子充る小不堪其志一何もの
 りども其本文ども讀得る事か。又漢えりて解
 するの亦一。ま。故人の註釋せる。河海明星孟律
 岷江辨引萬水湖月。の類卷數多き大部の品、更も
 以るも十帖をさる源氏華の轉り。紹巴抄忍草等小て問
 合をさるま。か。をさる者わ。一覽するも
 た中より。五十四帖の繪を寫し。画上小一首たりたを
 あげ。児童の眼小ふ。聊物語のゆき。をさる

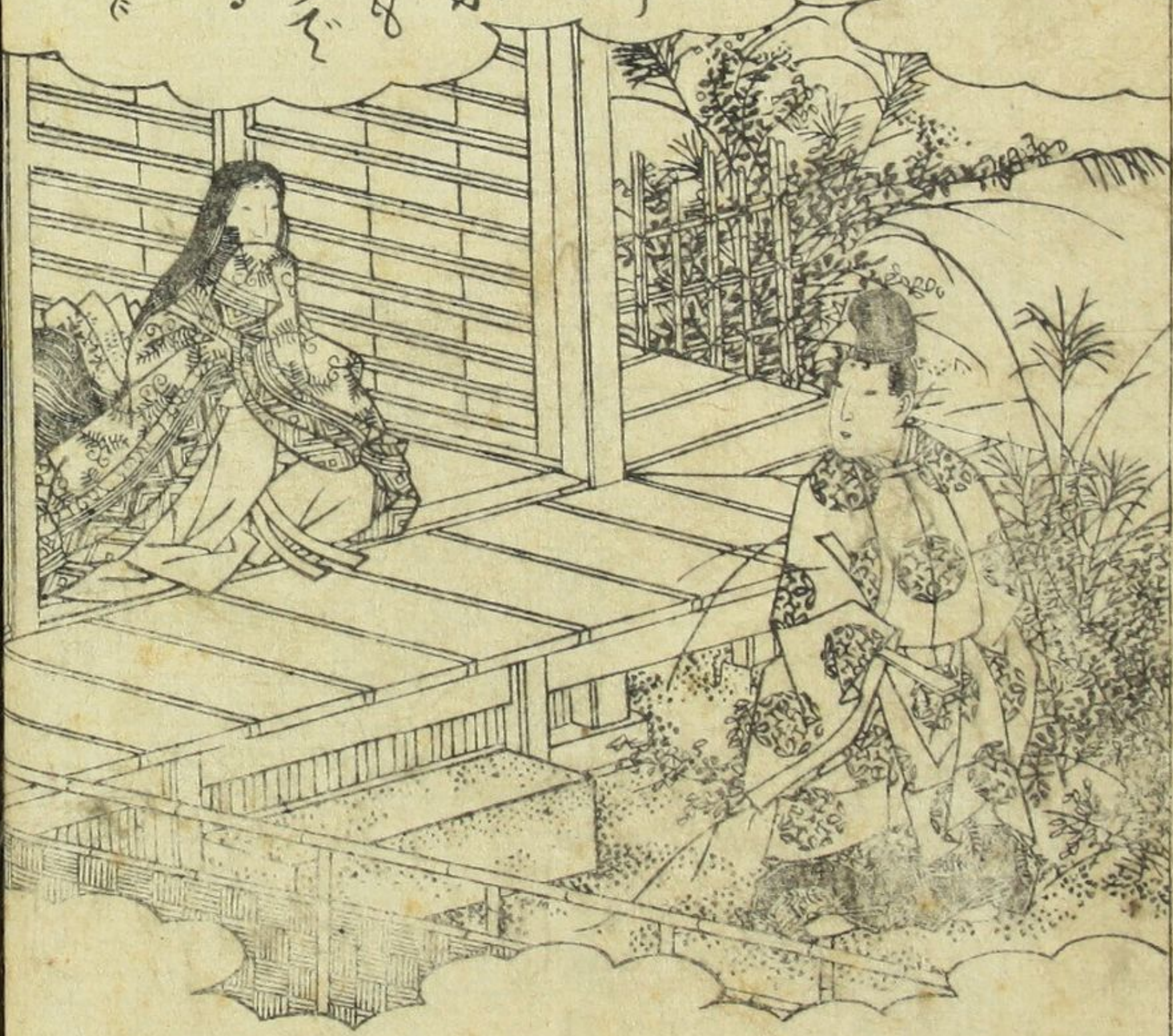


むけりやうのふ
 るたののけりい目
 ちりあがりあか
 ら老人の耳目を
 おどろかすをどの子
 どのをあさうく
 ほけりまのけてま
 てまらまら成
 武部不伴せらま
 けまままら石
 山寺小通教して
 は事をいのりや小
 柄も八月十五夜
 の月湖水小うり
 くのづらうららの
 ままらまら小柄

空 空 空 空
 うけ せまの
 けを
 うる
 本の
 けふ
 人乃
 うな



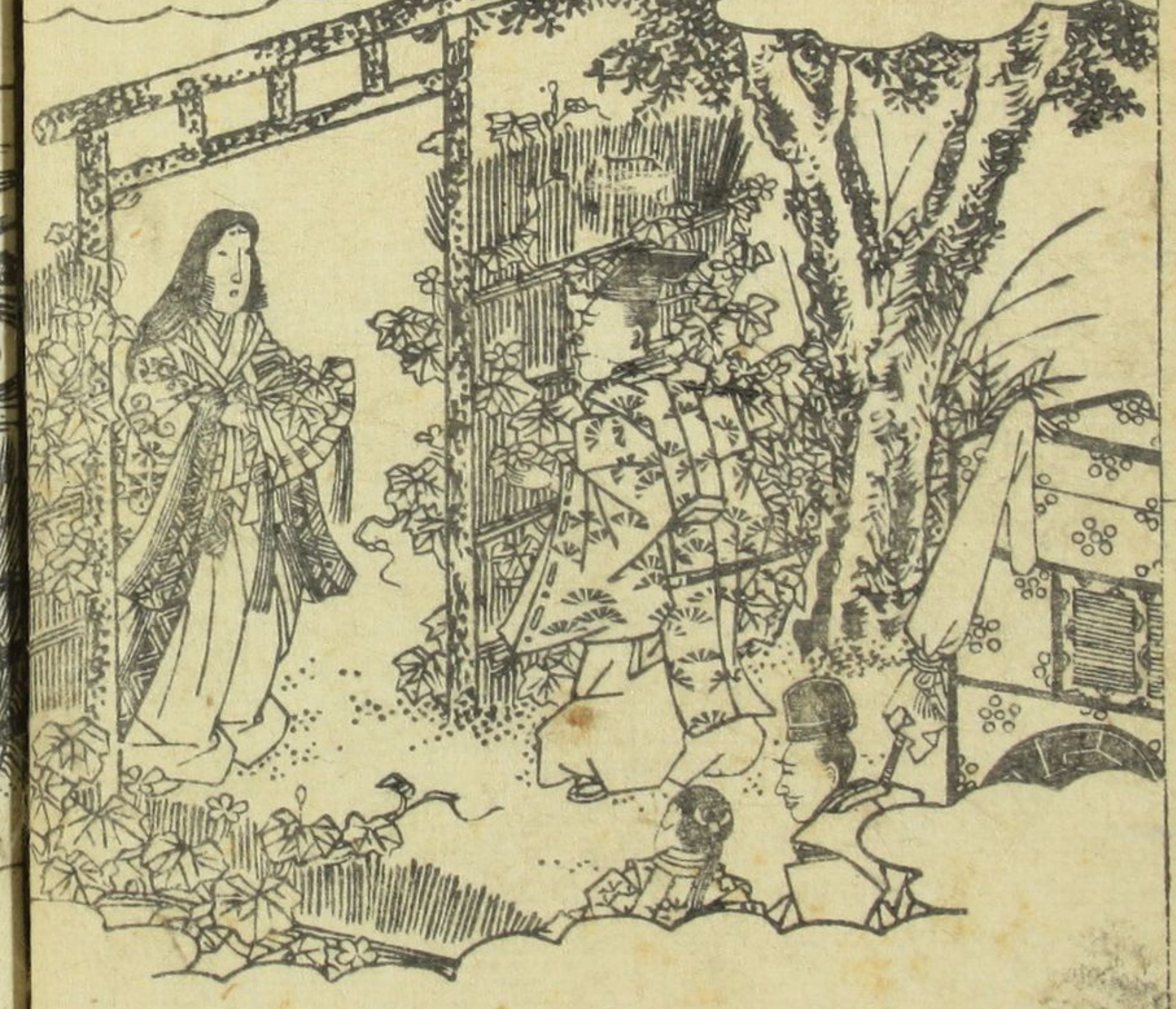
常本
 教
 ぬ
 おの
 うさ
 あら
 けゆ
 け



うろてな納しけり
 か今ふ石山さふわり
 とのふ光源氏をた大
 原ふちそふふの玉を
 志まふがうらふおふよ
 そのふ月公且右居
 易のいゆ一をうん
 久在納え黄相
 のふあをいらいひ
 こかきやうる救じ
 そまより次弟ふ死
 くらへ又十四帖ふ
 さしつ甘うしを
 権大納えは減ふ法
 書せまやうまえ秋院
 小やあはせなる

法成寺のへた圓自興
 書を加へらまそいやく
 け物持世ふ皆式部が
 作とのまあなり老比
 丘筆を加へるあまう
 とさ
 誠小君父のまどなり
 仁義の道好及の深善
 提の極小のまままよ
 まをのせばといふる
 事
 そのかむむさ子子の
 高言ふむらしまの
 ありあふのよう免
 きらふひふあなり一
 の中ふは家の上のるを

夕顔
 花乃
 づれ
 の
 ざら
 づれ
 の
 づれ
 の
 づれ
 の



若葉
 花乃
 づれ
 の
 づれ
 の
 づれ
 の



まぶさてうたひを
 ちよ小菟武松の名を
 あくまては武松と
 号せしはなり
 一説小菟武松の名も
 うたひのちよとて後ふ
 菟の花のちより小菟の
 字小改めり云々
 或説小菟一条の院の
 りのちより上東門院
 一まおとせり云々
 ちよりのまのちよれを
 ちよりあせとせを
 ひるふちよりては名を
 とまひり
 石小菟云々

すはわりののまを
 八月十五夜の月遊水
 うつりて物産のちよ
 室ふらうを早ね
 さねと佛茶の種
 文をひらきて
 との儀ハ実を
 用ひきり
 大般若經一巻を書
 て身細けきハ
 みる
 須磨の美小保氏の
 させんの子をうたひ
 八酒の宮の元大臣
 言明公云々
 此祝信どぐり

ままつかさ
 末摘花
 お川り
 いちと
 この
 まま
 けん

紅葉賀
 のちよ
 あらぬ
 袖うち
 あり
 あり
 あり
 あり

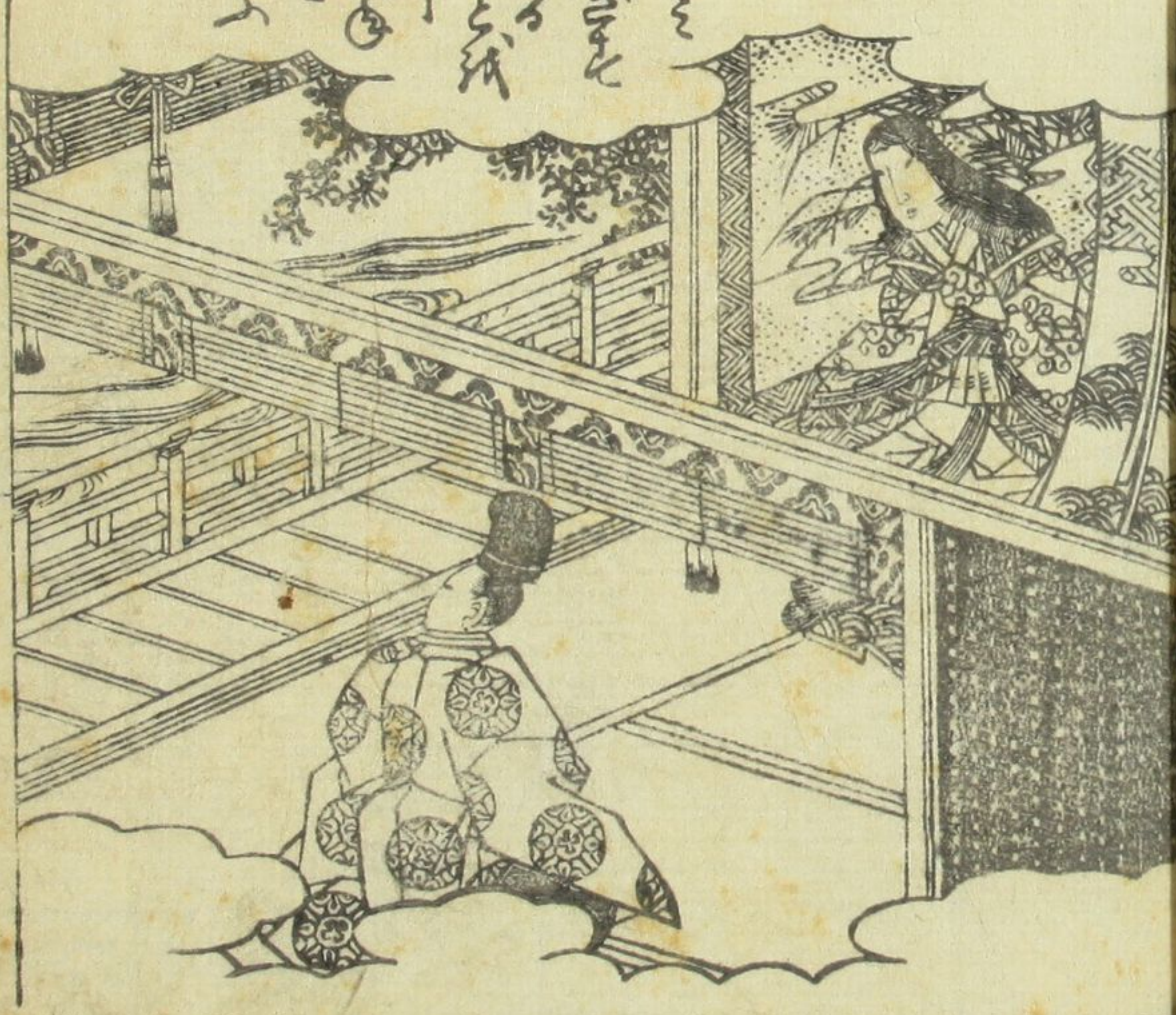
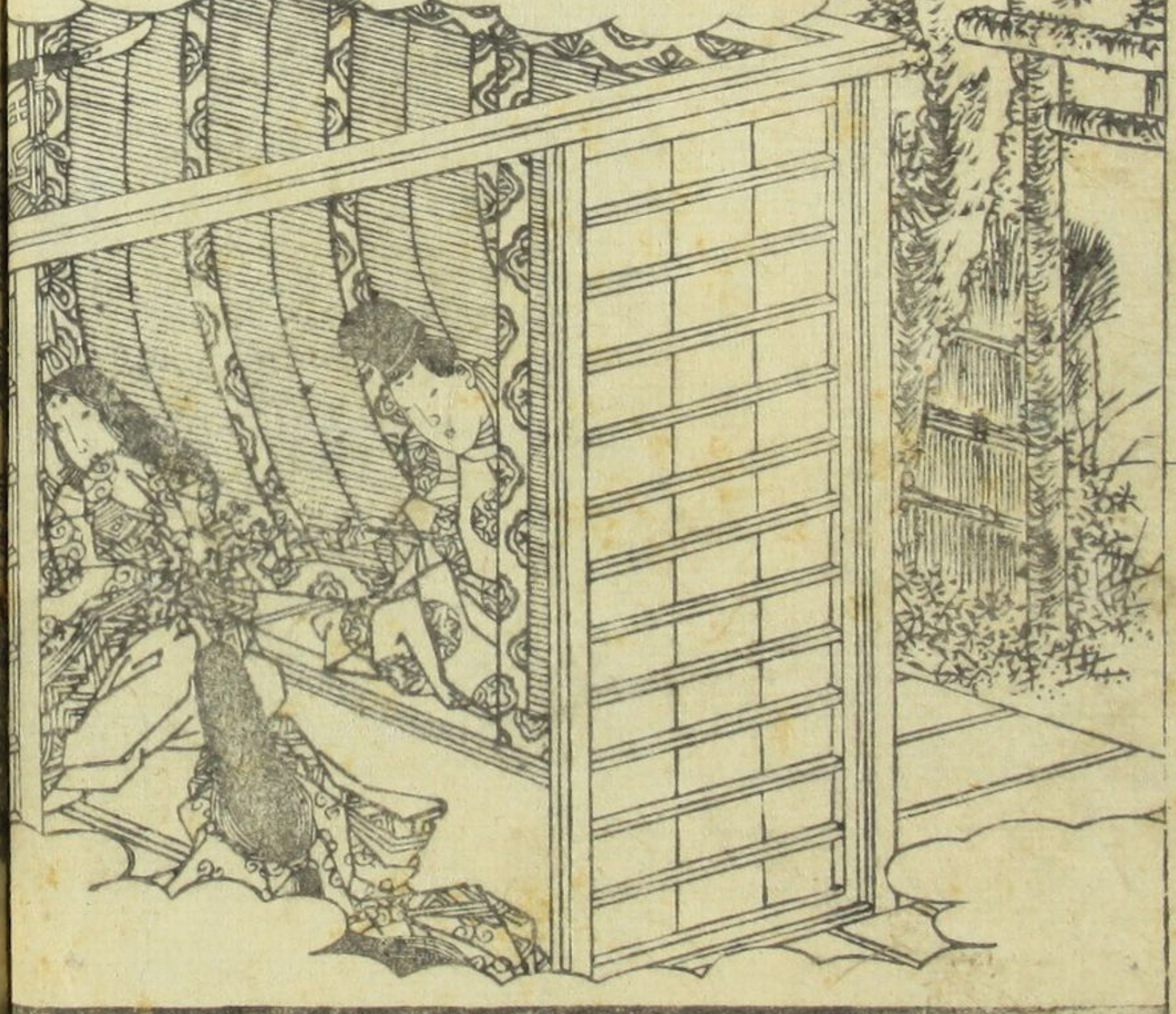


又小ついでに...
 又聖主賢后...
 小付...
 入...
 舟...
 朋友...
 夕...
 且...
 官...

本...
 宇治の中君の白女
 都...
 人の...
 小...
 且...

神...
 神...
 杉...
 づ...
 ぞ...

花...
 花...
 香...
 花...
 花...

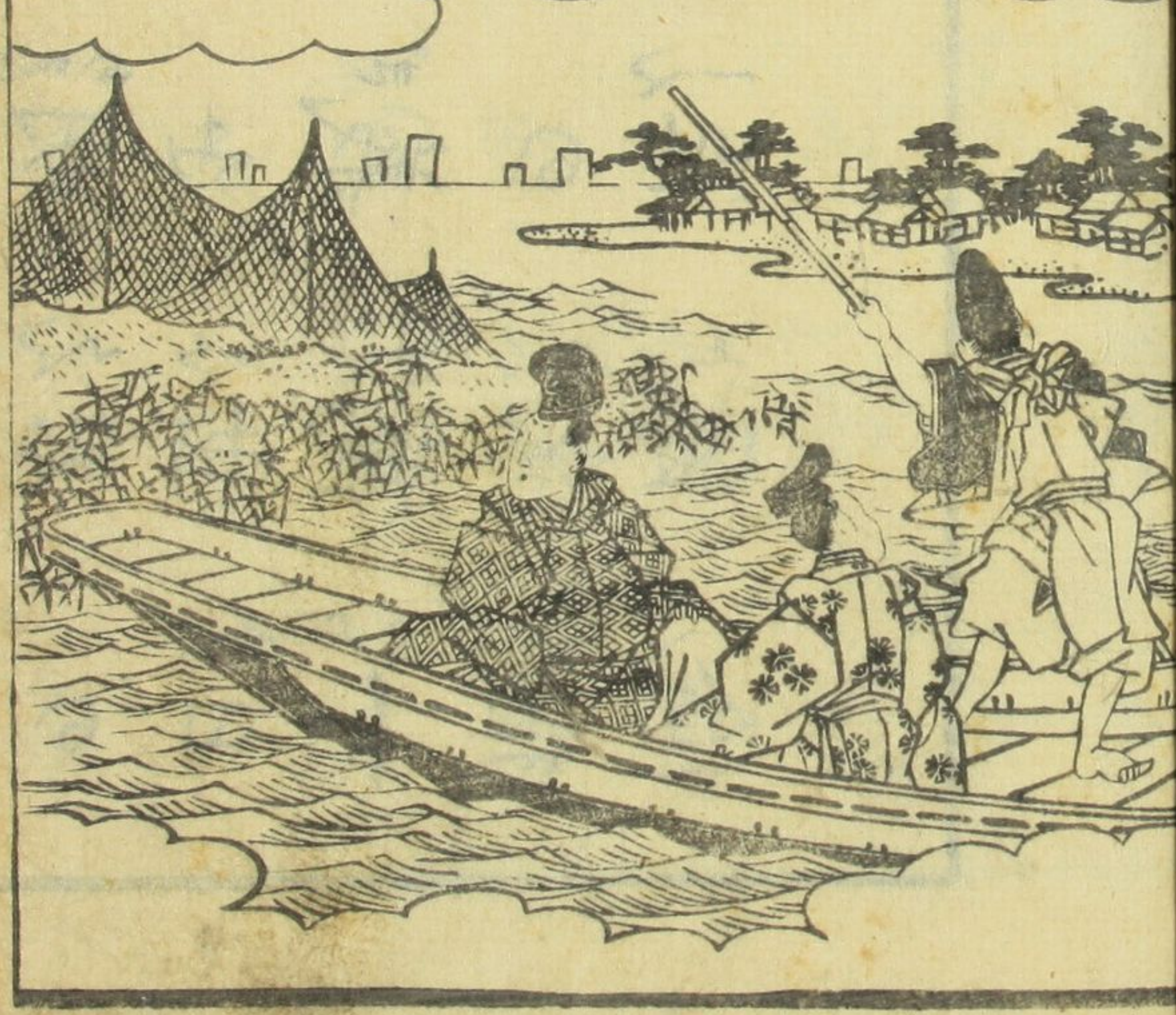
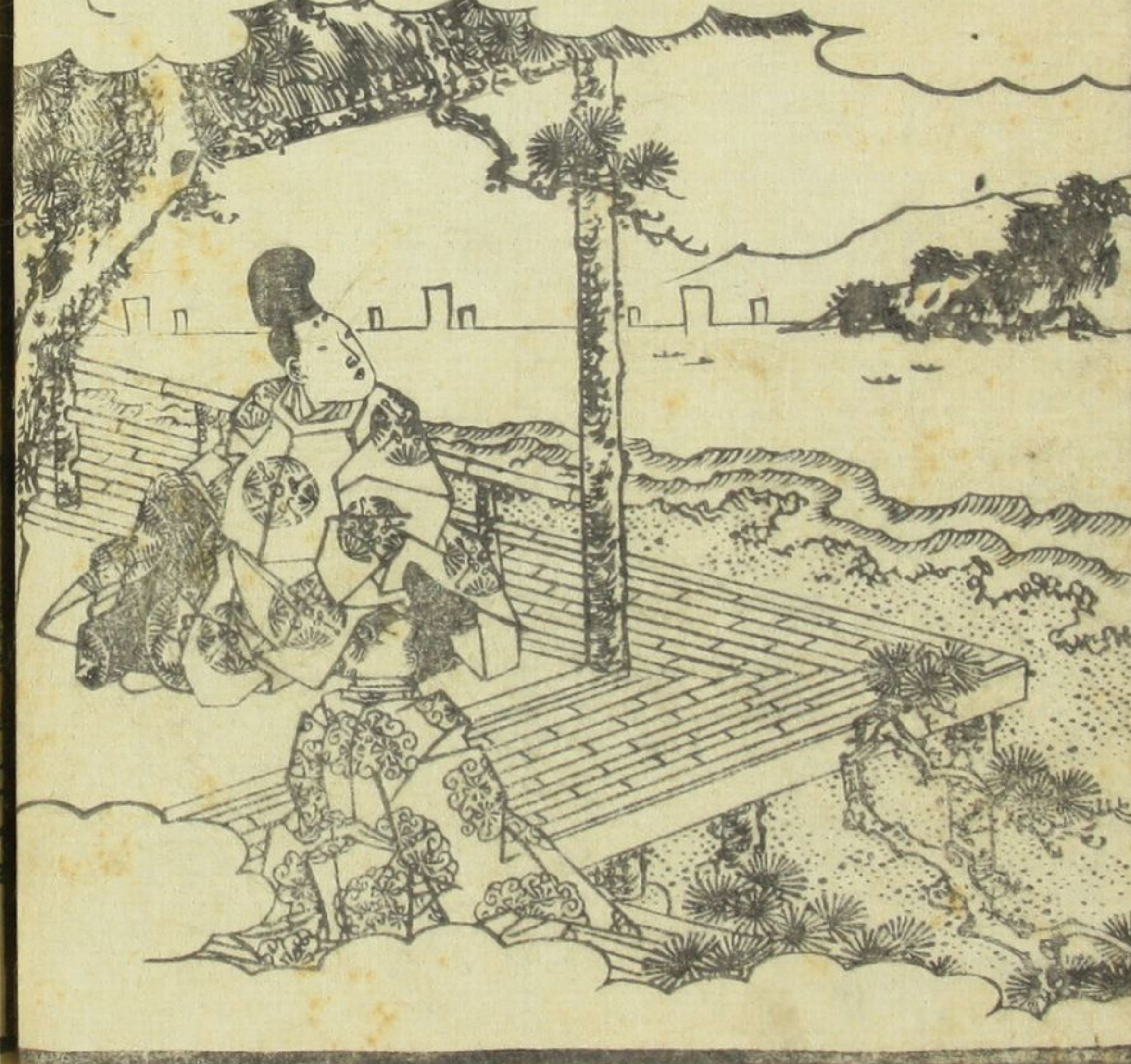


事万水一橋小云醜醜
 朱雀村上は三代小准
 ぶるありさき六桐壺
 のみうとをバ延森朱雀
 をバ天慶冷泉院をバ天
 曆小比一甘り光源氏
 の君をバ延森の西子西
 の宮の尤大臣を明公
 小比さるあり周公且
 東征妻逐相在納きの
 ありを思ひ又光君
 友壺の女御蜜通の事
 在在の相林二条の后
 小蜜通の依相似より
 小准ぶるあり
 源氏八朱雀院冷泉院

うと書くふるふる
 て宇多の天皇より
 始まゆいありありあり
 のことらね悦あり
 一一条院の西時の
 さぬをあらはさる
 いひさるるもの
 思ふべし
 此物語作者の事
 宇治大納言物語小
 日今八むり一載あり
 守為時とてさきえ何
 る世小かきうくり
 なる人八はふさきさか
 ちありはあつ源
 氏八作りするありと

須磨
 望たれ
 せをの
 わきをを
 かのひ
 あり
 すはの
 浦
 ありて

明石
 秋の
 けきげ
 こぬよ
 雲井を
 うけ色
 中世の
 まもを
 せん



うつるるは武部日記
 ごとく文部をうきてん
 帝ハ四代目年月六
 十三年の後宮に
 人の御つらひもあは
 しそつらりめてゆく
 世上のあらひつるを
 思ひこりくあり
 と末代ふあり
 のきわひを文章ふ
 あらひつる
 は物語發記の祝さ
 まへありあり
 武部日記の作しつる
 も分明なるは皆一



ちうつるるを
 むせめき
 書せり
 友系兼冬公の世績
 同書之跋云班固
 が史記を班固が
 つぎは武部系
 物部小大郡二位
 宇治十帖をそく
 りしつるのあり
 小云
 源義経引抄云
 三光院の御説云
 宇治十帖は武部
 が筆との説は
 用ひむ文章の



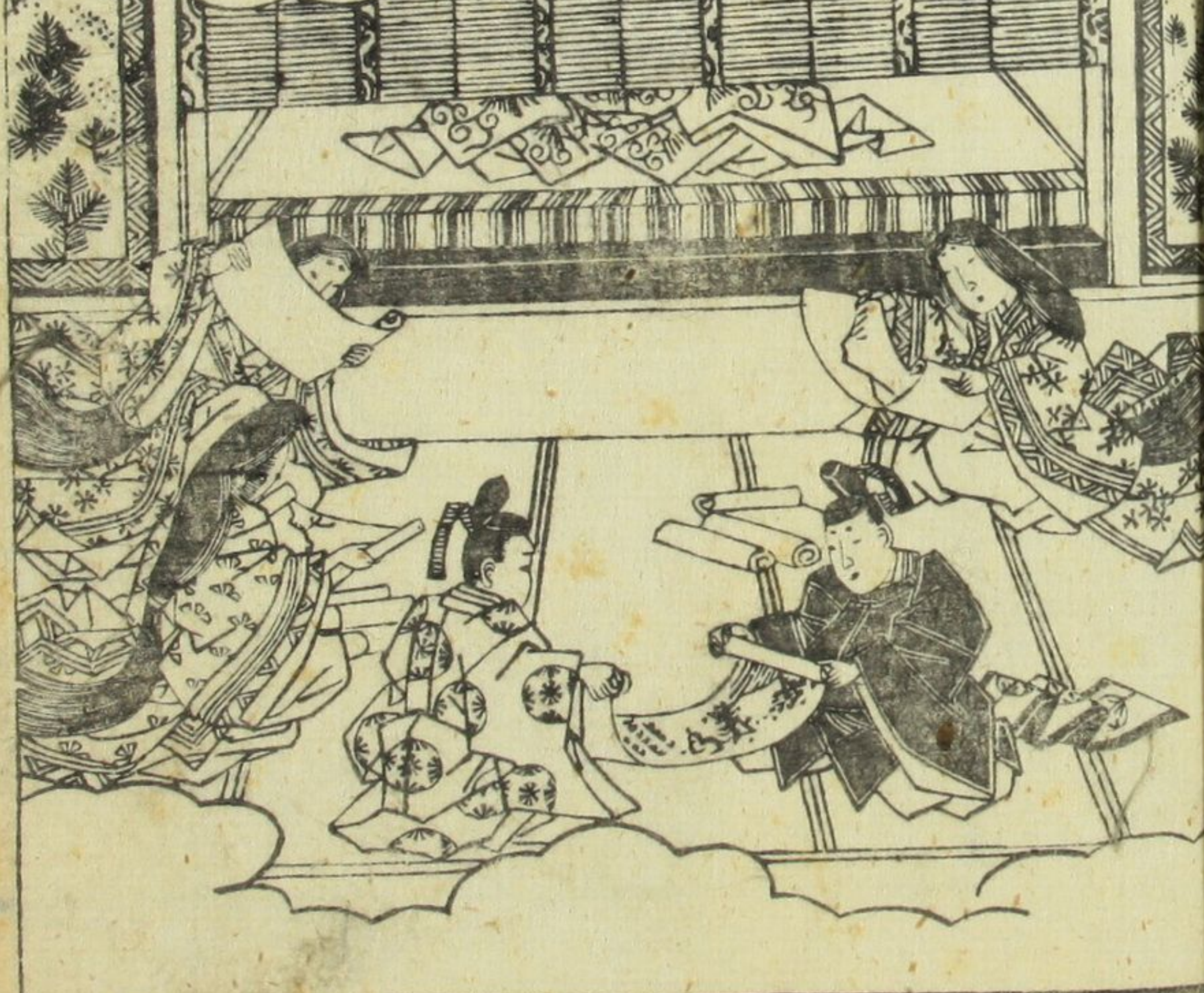
定一七信一が
 け物鏡本一
 抄孟洋抄
 乃成々自筆の本
 もころく今世
 けらるる源の光
 乃八本を以て校
 合取於一々家本
 と存りしるる
 二条師伊房本
 冷泉中納言朝隆本
 堀河九大臣俊房本
 其表紙といふ
 九大臣の筆跡

後一位藤子本
 土御門右大臣女
 系極北政朝
 法成寺関白本
 尚侍版本といふ
 又条三位俊成本
 京極中納言定家本
 青表紙といふ
 おのつて本といふ
 とも皆異同あり
 古写本をうんぐ合
 せし且了見を加ふ
 べきものら昔もの
 其言あり
 河内本八河内の子

関巻
 あら
 さうの
 せまや
 かしら
 ながま
 志げま
 好書本の
 申を
 こころん



あまの
 繪合
 うきめ
 その
 をり
 けの
 さい
 色あ
 うこふ
 おころ
 好書本の

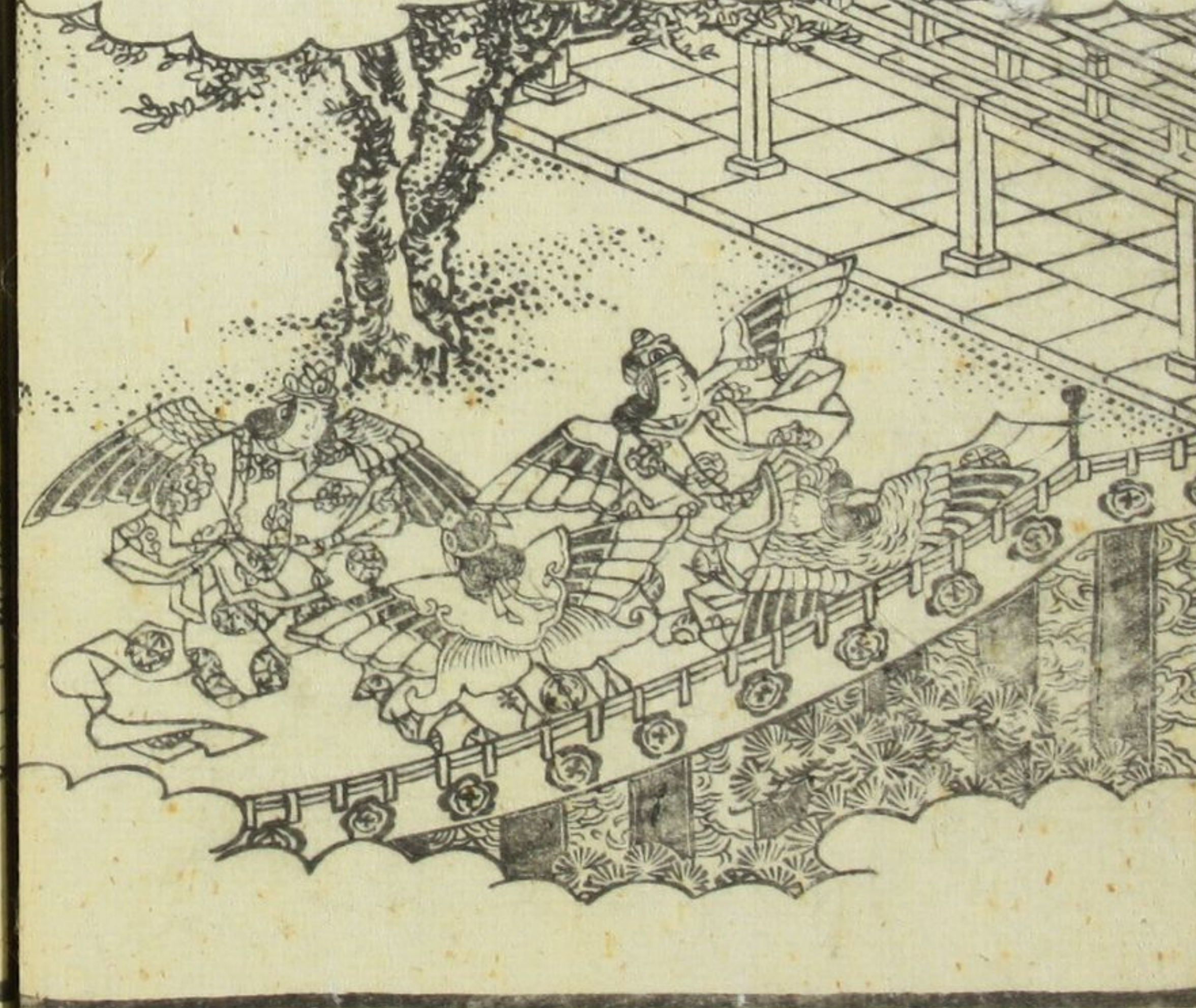


世の抄相ふりけく
 りつら吉抄ふある
 を引くひふ今え
 ちよぶととら多か
 のうちととひ河内
 ふもあは青表紙小
 もあはよきを用ひ
 あききをのぞけく
 てるべきるこまきく
 うみのうり今の
 世ふ傳つるとあらハ
 りのまし傳写のあや
 まりくまづらひのち
 ぐひ脱落誤抄多
 一七きと一七き
 所多き小はぬのが

への糸極黄門を
 ぞどあ母々の先達
 心をつくとゆくと
 あもつとて美就他
 書ふことあるあふ
 徳本とのふああ
 まをあくと若か
 多しとひひり式
 紙が回きをのりて
 そのものをうらふ
 ぎるるああぐと
 ようとととと
 更科の記ふとあ孫
 まつとあどまの
 人とのその物とら
 のものぐり免味

花ぞのま
 胡蝶
 おてふを
 さや
 みる
 妹まの
 ろとく
 えん

螢
 身をの
 わかま
 こそ
 ひふり
 まさる
 ねのひ
 あらん

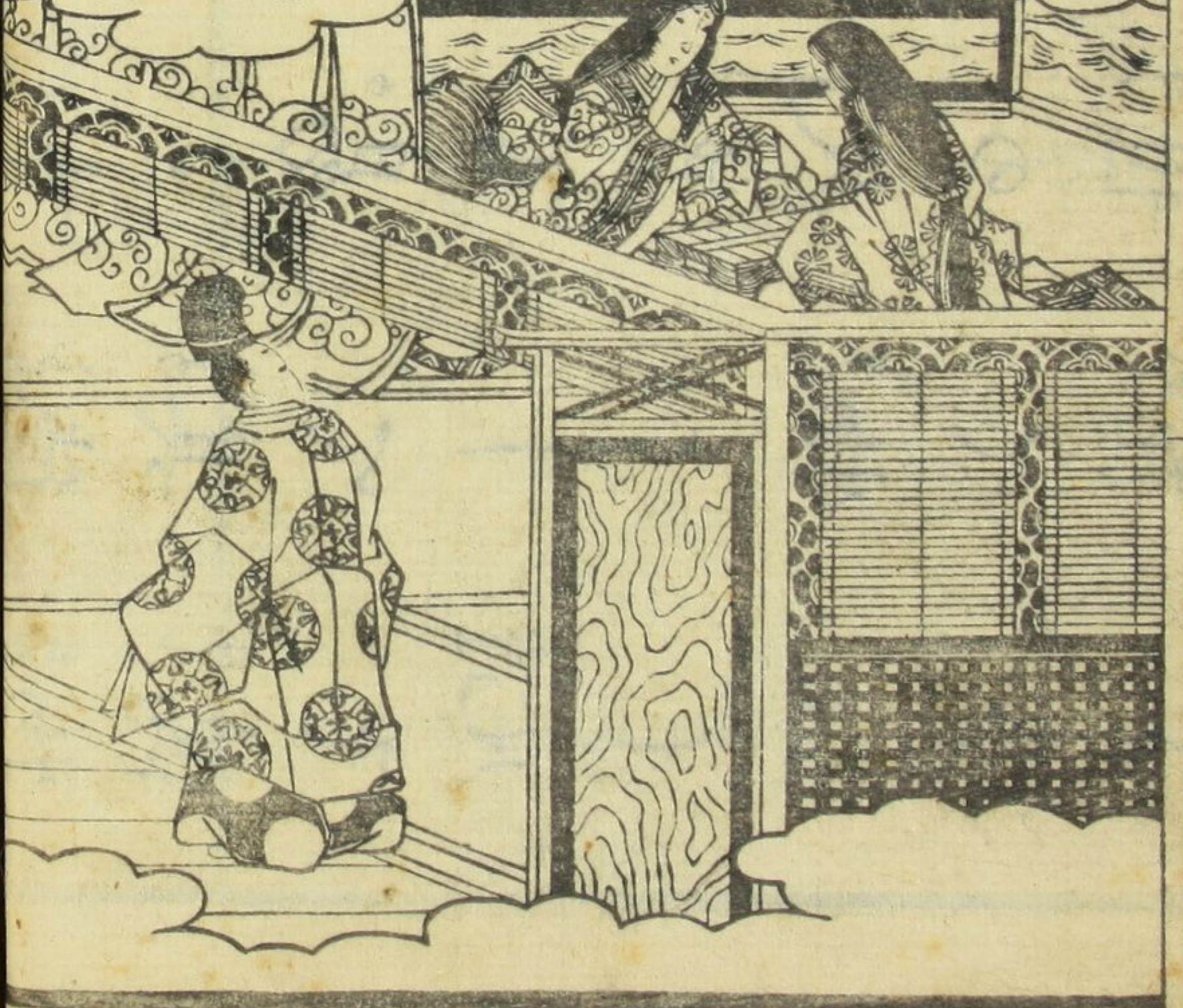


氏のあやうなるがこ
 るをきくふいとあは
 さはまゝで我がまゝ
 まうふとふしうぞ
 かわく徳らんま
 又云先源氏をりの
 人ハ世小かりとあ
 うを大粒のうらわ
 らしとあまふま
 もあれた世ありま
 又云しきうらんお
 とあうくちああ
 ま相伝ふあ先源
 氏あどのやうふあ
 人を年小ひとふ
 ぬてえううた

まうりてうたあ
 女君のやうふ山
 かく一をあらま
 えあのそちあを
 ああえいとあを
 小あててんはあ
 ああをよりくま
 ちあをせああ
 りあうへうあ
 まうとあまあ
 えあのま
 又云は源氏相が
 一のあよりして
 又せとあを知ら
 ふあのま
 又まあまあ

常夏
 なま
 この
 あり
 笑を
 つま
 ぬとの
 うまあを
 人や
 たづねん

篝火
 かき
 火の
 けり
 こそ
 よあ
 せぬ
 ほの
 あん

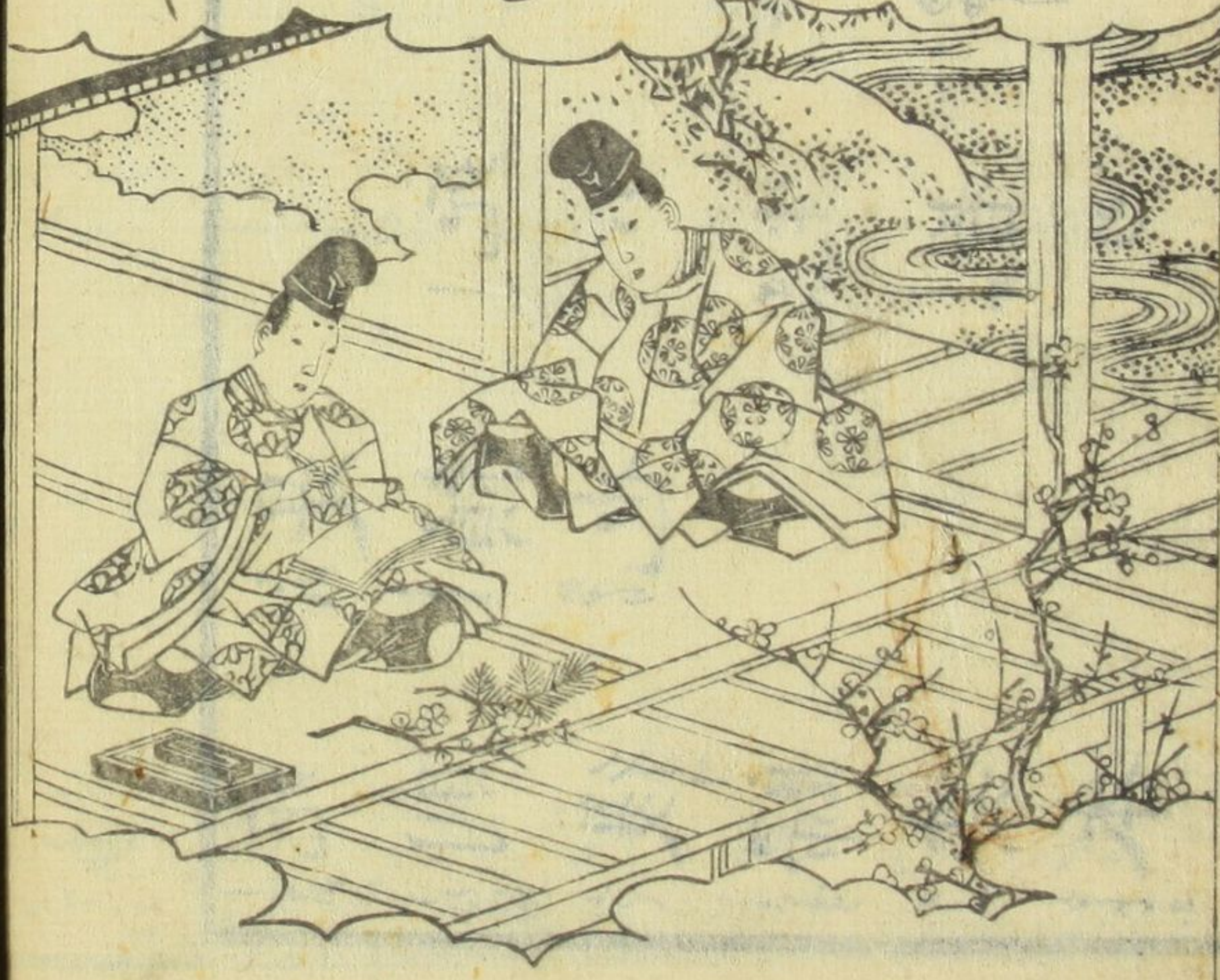


らうふかやゆきまこ
 とふやとけふやこひ
 うらふやとあやとこ
 おがゆきとこより後
 のものごころいかに
 りとをさうりぬを死
 のものごころいかに
 うくむつらんんん
 源氏ふまきりこん
 りをさけり物主人
 あらんやうがふひ
 とりまきりこん
 を物主とてまけん
 ららんんんんんん
 俵りのせんんんん
 志んんんんんん

東鑑四十三ふえ建
 長六年十二月十八日
 丙戌於河内源
 氏物部事有河内
 儀河内親行流之
 云々
 鳥丸光雄ゆえ源
 氏物部一統のこを
 ハ皆そりりゆ毎ふ
 哥ふらうらうら
 ささば中の院の源
 氏の備前の時鳥丸
 どのくおあせらさ
 源氏ハ先へて哥の
 注ありと云えあま

梅が枝
 まみの
 ちりあ
 枝ふ
 とま
 うつん
 神ふ
 あさく
 一は
 りや

友重
 まの
 君
 おの
 たの
 まん



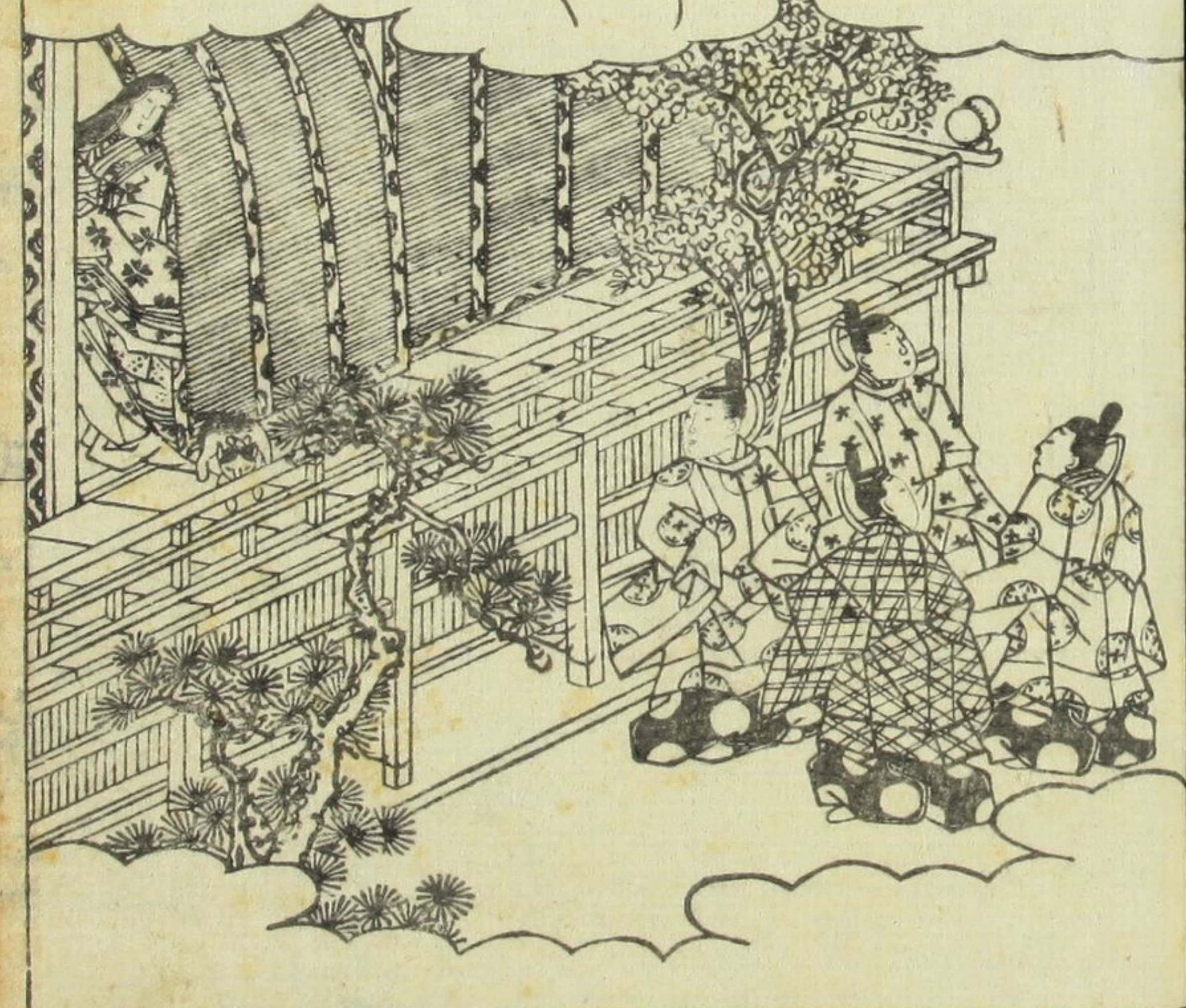
源氏ハ和綴の奇筆
 あり言旨法下の臣
 小文本孝庸とのひ
 一人因州の牧かつ
 へらるは人の後小有
 附孝庸言旨法下小
 世間のたよりふるる
 書ハ何をち書一と仕
 るべきと云ふのま書
 けは源氏物語りと
 こえな手ひ一ふ哥
 学の書一のものゝと
 とひなきバ又源氏

物語とあへてさせ
 こまふ何もうも源
 氏ゆきをまぬる事
 とうけぬりぬ源
 氏を百遍つぎふよ
 てるものハ再学の
 成就せるありとのこ
 まひ一孝庸が
 説ありと云々
 勅撰集の中ふあ
 ののぐりの名の出
 ころハ
 千載集
 新勅撰集
 倭古今集
 續後拾遺集

若菜上
 こま川
 まを
 ままの
 よらひひま
 ひまを
 のべてや
 神の
 こま
 こまを
 つま



若菜上
 こま川
 まを
 ままの
 よらひひま
 ひまを
 のべてや
 神の
 こま
 こまを
 つま



新續古今集

右の撰集等之

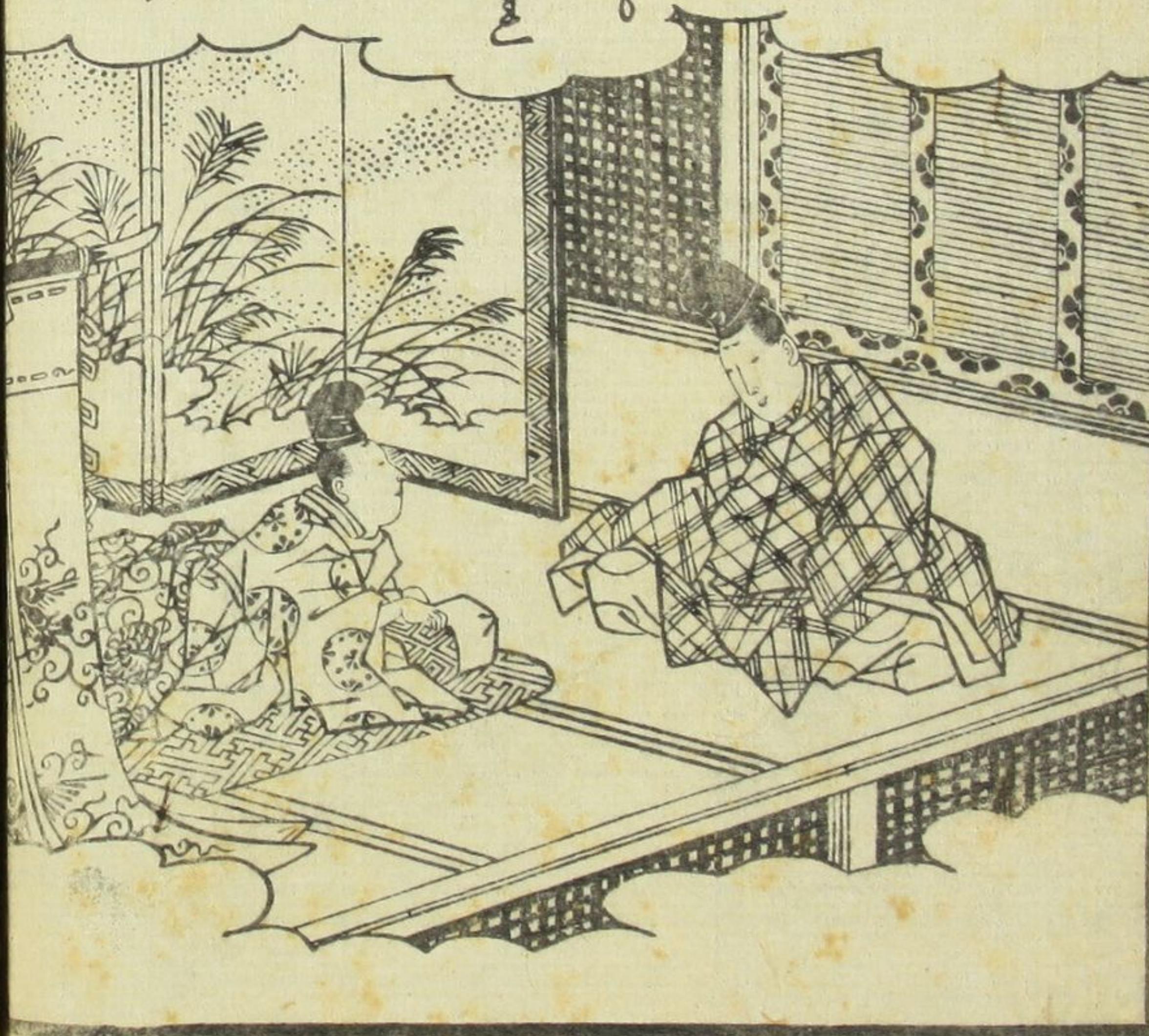
拾遺抄小源氏もの
がより目録部立
あり明石の次小浦
伴ハ東名の次小枝
席等の巻ありき
今のちよりハ五巻
多し

又十四帖のうち橋
の巻より後の序
揚のまじふりたるを
を宇治十帖といふ
こゝハ先源氏の君
かゝりさせしむり
のち小柳子のかゝる

大納言治のハの宮
の姫君小うよひこ
まひりあをを書
けり
更科日記小源氏
ハ又十帖といひり
り六十帖といひり
今流布ある本巻
隠浦伴枝席等の
二三帖も落しるもの
れすこ大教をあげ
て六十帖といふらま
を天台の六十巻不
確らくするといひ
抽巻の中ハ天台教
公小つげきうけり

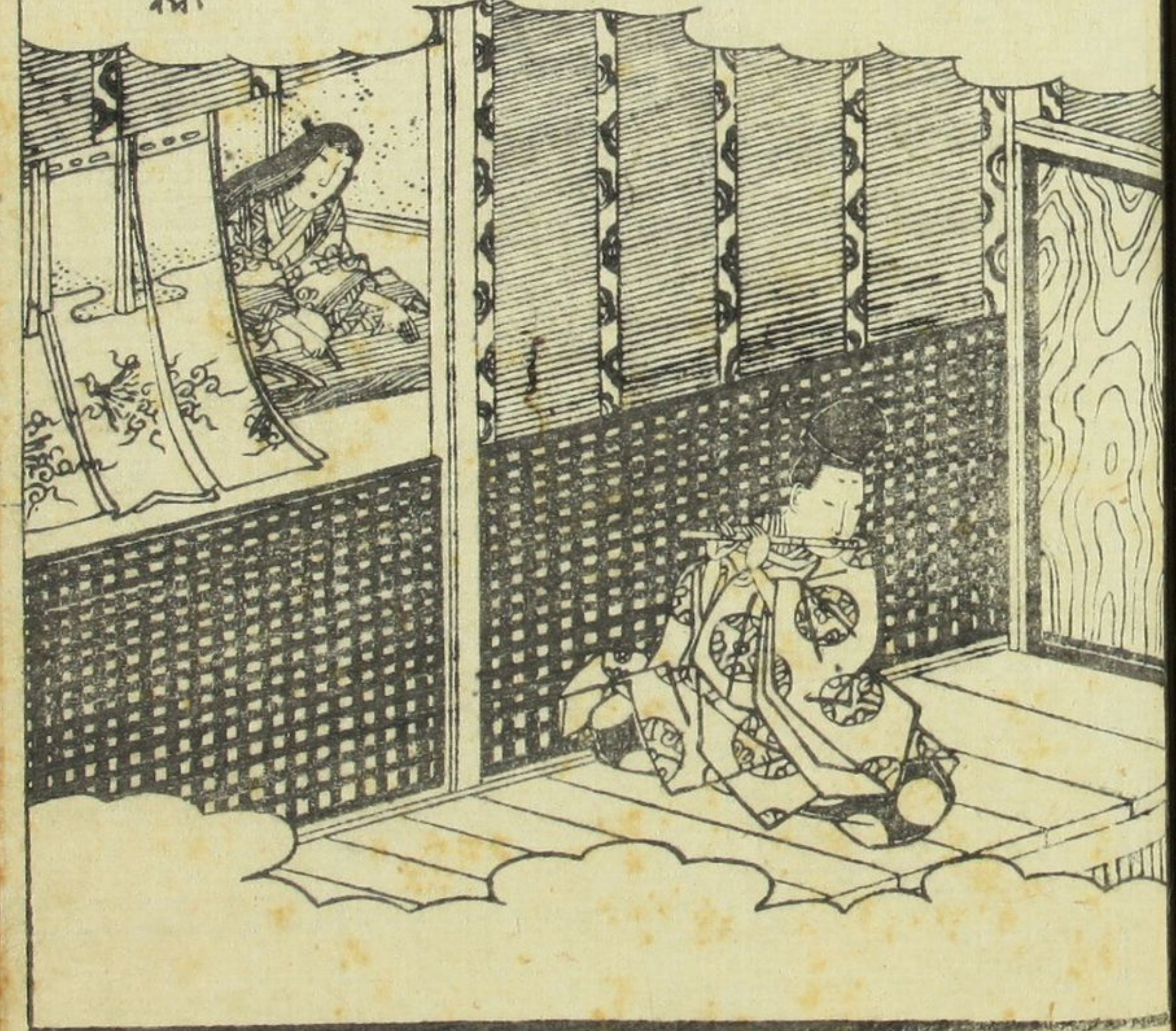
拍木

うんぎ
拍木
しん
とく
けり
むき
ほ
おの
の
らん



横笛

よ
おの
ま
こ
く
む
ま
つ
せ

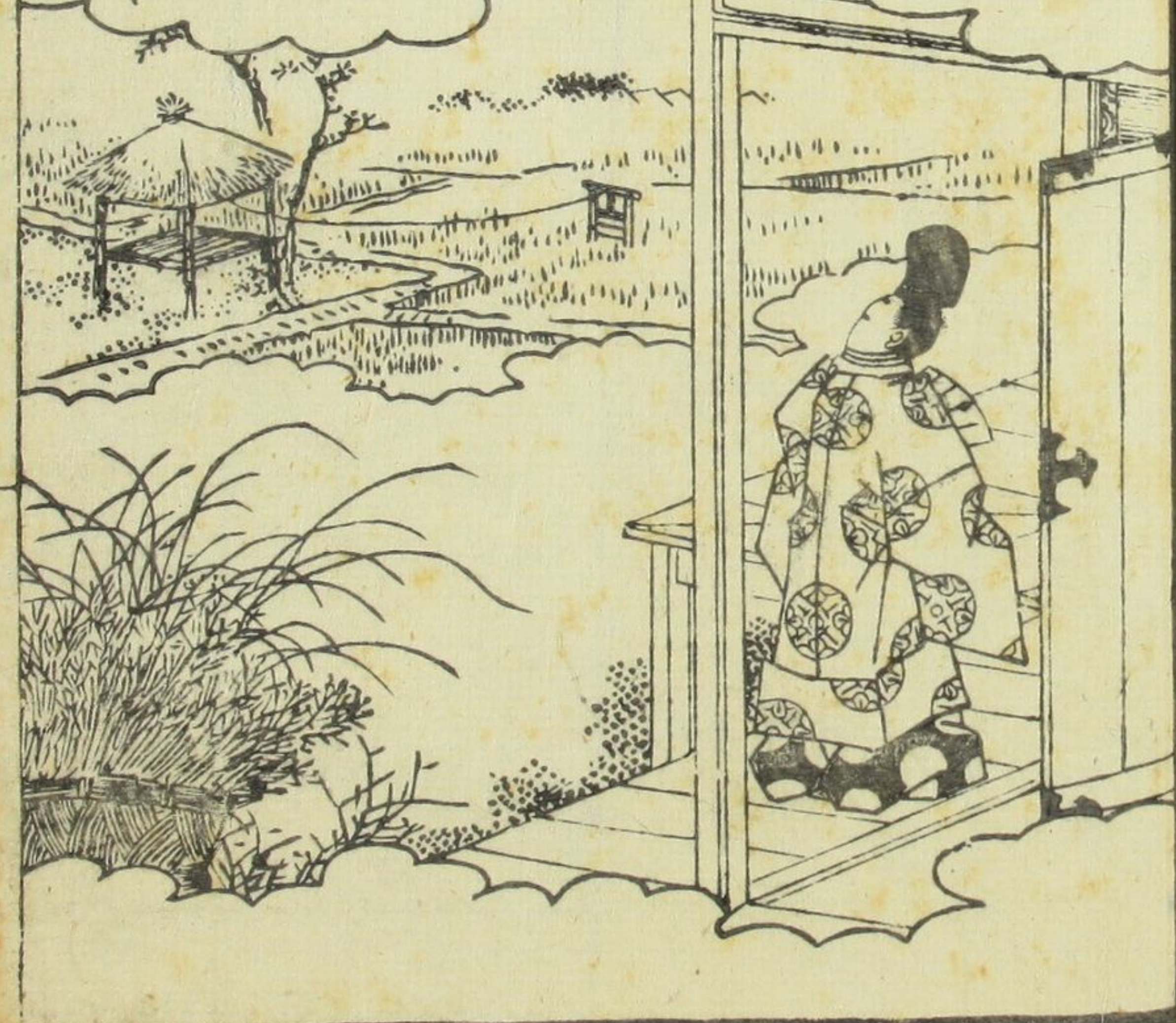


あふふよりて台宗
 ふうふうりて人の
 かゝりてのれ
 源氏物語のあふふ
 好みのあふふりて
 らふふはごまて
 好みのあふふりて
 らふふはごまて
 世々の末ふりて
 けは上代の英風か
 とふふはごまて
 んふをのふふりて
 あふふはごまて
 書人ふりて
 づけむる人ふりて
 けは世ふあふふ

らふふはごまて
 んふをのふふりて
 あふふはごまて
 書人ふりて
 づけむる人ふりて
 けは世ふあふふ
 とふふはごまて
 んふをのふふりて
 あふふはごまて
 書人ふりて
 づけむる人ふりて
 けは世ふあふふ

あふふはごまて
 んふをのふふりて
 あふふはごまて
 書人ふりて
 づけむる人ふりて
 けは世ふあふふ

あふふはごまて
 んふをのふふりて
 あふふはごまて
 書人ふりて
 づけむる人ふりて
 けは世ふあふふ



化をうへるの事
 多し一はふり
 て六國をさゆらむ
 家もまことこの
 むさるふよりてけ
 物げりふもは海
 のゆふよをさく人
 情をつくしあじ
 り且志せいのつり
 ゆくさぬをよくあ
 せり舟をさく免
 こころのたまま
 もせきくの人の
 氣うこを信うま
 まごころくさきつ
 りせりこそ又け物

げりふの事人
 情をえたるあ
 とも妙ありま
 けののげりハ風
 化をのくしか
 けり申ぬもさ
 のまをさくし
 あり舟り来竹の
 あそびハ君子の
 ざりりくさんげん
 のあそびをさ
 ぎまば上藩の風
 俗さそくがんが
 うふあさるもの
 けものげりハ志
 んと人のこのめ

竹川
 け
 ひ
 せり
 こころ
 の
 ま
 あり

橋姫
 ひめ
 の
 さ
 ら
 の
 さ
 ら
 の
 さ
 ら
 の
 さ
 ら
 の



